

三、師の謙虚な姿

(ページ『出会い』参照)

高橋先生は、

「朽木さん、組織を造ったらダメだね」

と、仰っていた。でも高橋先生の組織がありますね。ですから他の人が質問した、「何故、組織を造られたのですか」

「私が話をする、沢山の人が集まって来てくれる。その人、一人一人を訪ねて行って、話す訳にいかないから、人に集まって貰う処を造ったんですよ」

しかも、集まる処は全部自分の建物ですよ、六階建てのビルですね。

ところが先生の処は、人は集まっても、先ずお金が集まらないんですね。また何故か、持って来る人も少ない。(笑)人が集まれば、それだけ費用が掛かりますからね。でも、先生は、「持って来い」とも言わない。

あちこちの宗教団体とか、そういう組織を造ったら、お金がどんどん入ってくるんですよ。沢山の信者がお金を持って来る。

そうしたら教祖とか、取り巻きの人の金儲けを手伝っているようなものですよ。今、宗教をやってご覧なさい——。誰か、靈感のある人を祀ってやっご覧なさい

——。五〇人、一〇〇人信者が集まったら、もう完全に御殿が建ちますよ。そのくらい、今の成長産業の一つなんです。 (笑)

そしてまた、そういうものを踏み台にして、政治家になる人もいる訳ですね。

そして、「私は、そういうものとは、一切関係がありません」とは言っているけど、選挙になると、そうではなくなってしまう。

それで、お金が無いので、先生に、

「先生、お金がありませんけども……」

「そう……困ったね。誰か持ってきてくれないかなあ」

と言っても、誰も持つて来ませんね。そうしたら次の日、お金を持ってくるんです。

「先生それ、どうしたんですか？」

「いや、会社からお金持つて来たよ」

って仰る。先生は社長ですからね。

「これじゃ、会社おかしくなるんじゃないですか？」

「いいんだよ」

「家も困るんじゃないですか？」

「いいよ」

って仰る。それから、高橋先生は何千という特許を持つてらっしゃるんですよ。貰った特許料を、またこれ持つて来る。

私は先生の本の販売の方をやっていた時に、著者である先生に対して、本の印税を払わなければいけない訳ですね。

あゝいう真面目な本というものは中々売れないんですね。でも売れる時もあります

からね、そういう時は有り難いですよ。だけど、前からの分や経費が掛かって、印税をまだ一回も払っていない。先生の部屋へお詫びに行く、断りに行くんです、

「トントン」

戸を開けたら、

「あっ、朽木さん、印税でしょう、お金無いんでしょう、要らないよっ」(笑)

「ガチャン」

戸を開けたら、頭下げて直ぐ閉める。(笑)もう全部分かってるんですよえ……。

そういう状態であっても、やっぱりみんなに一所懸命に話をしているんですね。

そして、何か訳の分からない人が相談に来る事もあるんですね、それも一回や二回じゃないんですけど、或る時に、ヤクザみたいな人が相談に来て、「高橋先生に会わせる」と押し問答になった。

そうしたら、丁度そこへ先生がみえた。先生はその人といろいろ話をした後、

「あ、あなたね、今お金無いんだよね、帰りが困るでしょう。歩いていけないよね」とポケットから、財布を出して、五千円渡しているんですね。そして、

「朽木さん、ちよつとね、私の本を何冊か持って来て貰えますか」
持って行ったら、

「あなたねえ、わたしの本も読みたいいでしよう、これも持って行きなさいよ」
——その青年は、とうとう泣き出してしまったんですね。

来た時は、まあ、こんなになって肩をいかせて来た人が、ウワーツ！と泣き出してしまつて、こつちは吃驚しましたね。——そういう事があつたんですね。

他では、そんな事はしないんじゃないでしょうか。「本のお金払え」とも何も言わないんですよ。しかも、反対にお金まで付けて——。

やつぱりそういうものが、本当の、人に対しての親切だとか、優しさじゃないでしょうか。

高橋先生は絶対に、「おれは」なんて威張つた事もないですよ。

一九九八年九月

四、初めての講演——両親に対しての反省

(ページ『反省の日々』参照)

高橋先生に初めてお会いしてから、三日位過ぎてから、私にとっては、先ず第一回の講演に行つたんですね。話を聴いた。

まあ、最初から分らないですよ。しかし、振り返ってみると、先生は、「人間というものは魂なんですよ。生まれて死ぬ間の事を考えては（拘つては）いけませんよ。それは、ほんの僅かな時間なんですよ」

と、そういう話をされたんですね。
二回、三回、四回と講演を聴いているうちに、まあ、眠くもなりますね。居眠りもする。ハツと眼を覚ましたら、何だか終わりの頃だったという、そういう事があつたりと、今考えたら、本当に勿体無い事ですね。そんな事を繰り返していたんですね。

しかし私は、何回も行っている中で、一つ疑問に思ったのは、高橋先生が同じような話を何回もされる訳です。たまには違う話も、と思うんですけれども同じ話ですね。

まあ、そんな事を思っているから居眠りをしてしまう訳ですよ。

実は、そうではなくて、こちらの話の受け取り方があつた訳ですね。先生はそこま